

明日を育てる

村田 勝 敬

■ プロローグ

「カチ」とスイッチの音。その音が鳴り終わるとともに、昭和四十年、三十九年、…昭和五年、四年、三年、二年、大正十五年、…（あとはいりゃく）。だんだん過去にいく。ぼくはタイムマシンを発明するのだ。そして、世界中に知れわたるんだ。そして一つを何兆円にもして売るんだ。アメリカに五個、イギリスに一個、ソビエトに三個、日本に一個、計十個作るのだ。そして、もうかったお金で、まずしい人を救うのだ。ぼくは、大きなことが大好きだ。でも、「そのタイムマシンが悪に使われたら、どうしますか」とたずねられたら、「どうしよう」、「おぼろしい」、「わからない」と答えるにちがない。ところがぼくは、初めから、そのタイムマシンの中に小型バクダンを仕込んでおくのだ。そして、悪いことに使いかけたら、ぼくのもっているスイッチでバクハツさせるのだ。ぼくののぞみは、ただこれだけではない。けれど一番これがあるようにだ。

■ ふり返れば

幼少の頃、地球温暖化が叫ばれることもなかったが、さりとて十分な冷暖房設備もなかった。私は風邪をひくといつも青洩を垂らし、服の袖でそれを拭いていたそう。そのため、袖部分はテッカテカに光っていたと聞いた。これはさておき、住んでいた集落の中ほどに内科医院が一軒あった。小学生になった頃、母は化膿した膝が癒えぬ私をそこに連れて行った。待合室に入ると、ふだん経験したことのない特異なおいを感じた。白衣姿に眼鏡をかけた白髪の先生は傷口を消毒し、塗布薬の付いた絆創膏を貼り、最後に尻にペニシリン注射した。その直後、痛みとともに強烈な何かが私の中を駆け抜けた。恐らく、物心ついて最初に職業を意識した瞬間だった。しかし、その3～4年後には異なる職業を口にしていった。還暦後の中学同窓会の席で小学校からの同級生に「村田君が医者になりたいと言ったので、故郷で出産する際、担当医になったらどうしようかと心配したのよ」と言われた。「ん、そんな…!？」と当時の記憶を遡ってみたが、空欄であった。

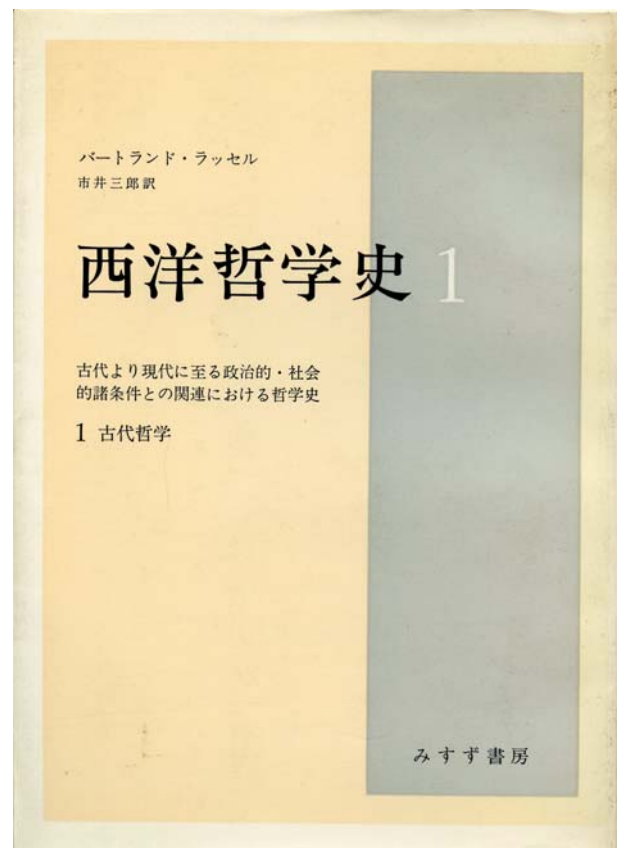
文頭は、小学6年の担任から卒業後50年経って送られてきた私の卒業文集だそう。 「ぼくがおとなになったら」と題する400字詰原稿用紙を見て、ギョッと目を剥いた。遠い記憶を思い起こせば、中学2年時にテレビアナウンサーから将来何になりたいか質問され

て「タイムマシンを作れる科学者になりたい」と唐突に返答していた。コンピュータの世界でMS-DOSが隆盛を極めていた頃、自作した統計ソフトの中に期日がくるとプログラムを自動消滅する機能を密かに忍ばせていた。現在も変わらぬモノがあるとすれば、「過去の事実（歴史）を塗り替えてはならない」という強い信念であろうか…。すなわち、過去の失敗も“反省”として心に刻めば、大いなる価値—災い転じて福となす—が生まれる。

■ よみがえる夢

東京の大学で電気工学を学び始めた1年目、和敬塾北寮での半年間の同室者は月田承一郎君であった。彼は京都大学医学部教授在職中に52歳の若さで逝去された。同室にいた彼は、机に向かって物静かに原書を読み、暇日にフルートを吹く、天才と目される人であった。ラッセル著『西洋哲学史』とバナール著『歴史における科学』を彼に薦められ、お調子者の私はその後も様々な本を買うようになった。

フロイドの精神分析に興味を抱き始めたのは彼が退寮したずっと後のことであった。自らの規範をど



ここに求めるべきか模索していた頃、大学生協でロロ・メイ著『失われし自我を求めて』を見つけた。その中で紹介されたフロイド理論に、当時もっともらしさを覚えた。人間的な理性や知能を司る自我、親から植え付けられた無意識の道德観や価値観を表す超自我、これらと異なる性欲や攻撃性といった動物的本能の三つ巴の葛藤が引き起こす神経症の説明は、電磁気学のMaxwellの4つの微分方程式と同様に、明快と映った。このような雑学が新たな人生を切り拓く(≈デンキからヒトに再び関心と呼び戻す契機となった)に違いない。

■ 医の未来

学生時代に熟読したMacMahon & Pugh著『疫学—原理と方法』に毒され、臨床医学実習の時に患者と接する度に「この人はなぜ病気になったのだ？」と疑問が湧き、病因に関する質問を患者に幾度となくぶつけた。ただ病気によっては、この種の質問は人の鬨聲(ひんしゅく)も買うし、セクハラ紛いに誤解もされる。このような経緯もあってか、卒業したての頃の関心事は“病気を科学する”ことであった。にも拘わらず、途中で“健康を科学する”を唱えるようになった。理由は、癌検診による放射線被曝についての自説を阿久悠にメールした際、「臨床のセンスが全くない。退職後2年間、私の下で研修医をやってみてはどうだ」と遣り込められたからである。

矢崎義雄編『医の未来』という本には、勤務医の過重負担、地域医療の混乱、医療システムの動揺など、医学・医療の直面する課題とその解決に向けた方策が記されている。学校教育の崩壊の一因は“保護者クレーマー”とも囁かれているが、同様に医療現場では“クレーマー患者”の執拗な苦情に苛まれる。しかし、学校教諭も医師も凜とした態度が取れる程に自らを磨いておらず、他者から信頼を得るこ

とができる行動や教養が示せない結果かもしれないのである。一方で医師の中には、国民や住民の人生観や道徳的な質が未熟ないし劣化したからだと考えられる者もいるらしい。自らが受け止めるべき苦難を他人に責任転嫁するのは止めて、相手に理解可能な言葉で意思疎通を図ることに努めよう。

■ エピローグ

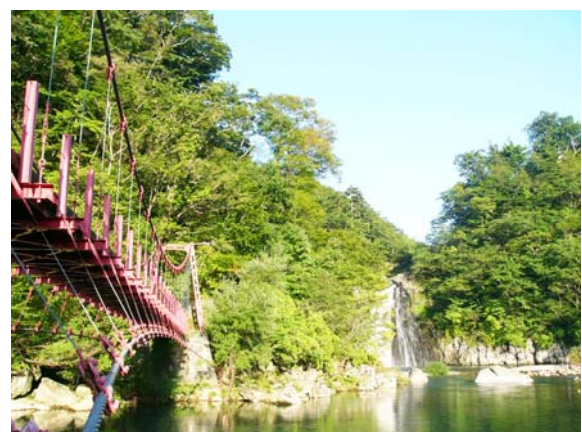
患者の治癒力を支援するのが医師の仕事である。一方、病気の原因を解明し、その原因を取り除く(すなわち、病気を治すだけでなく、病気に罹らないようにする)のも医師の役目だと思う。そして患者がいなくなれば、医師にできるのは死の宣告と死亡診断書を作成するだけになり、彼らから袋叩きされる…と妄想ばかりが虚空を舞う。願わくば、健康を科学し、かつ健康寿命を延ばそうと志す医学生さんが一人でも多くなることに期待したい。その手始めは、一つひとつの出来事(event)に対し自ら納得できる理由(excuseではなく*rationale*)を見出せるようになることである。

最近の若い人は他者への健全な依存ができず、自分の生きている世界に現実感(リアリティー)を持ってないらしい。秋田新幹線の中で4時間ズ〜とスマホばかり覗き込んでいる若者がいる。また、時間を持って余すとLINE仲間に連絡し、夜毎に集合する。さりとして徒党を組んで生産的な活動をする由もない。過ぎ去った時間は取り戻せないし、本を読まない/ニュースを見ない無為徒食の輩に「時勢を読め」と諭しても儂きことかもしれぬ。そうではあるが、明日の日本に幻滅することがないように、寸暇を惜しんで努力する姿勢を大人(所謂“先生”)が示し続けなければ、彼らはお手本すら失ってしまう。

「秋大生活のひろば」No. 156 (2016年1月刊)



秋田県横手市山内の千年杉(幹囲11.8m)



秋田県鳥海山麓にある法体の滝